

第63回 大阪母性衛生学会学術集会

会 長：橋 大介 (大阪公立大学大学院医学研究科 女性生涯医学 教授)

学術集会長：谷口 武 (医療法人定生会 谷口病院 理事長・院長)

日 時：2024年12月7日(土) 9時30分～17時 ※9時より受付開始

会 場：大阪市阿倍野区旭町1-4-3 大阪公立大学医学部 学舎4階 大講義室

テーマ：「大阪の性教育の未来を考える」

＜ 研修会 ① 9:35～10:25 ② 10:25～12:15 ＞

座 長：遠藤 誠之 先生 (大阪大学大学院医学系研究科 母性胎児科学研究室 教授)

講演①：「25年の性教育活動 大切にしたいこと そしてこれから・・・」

谷口 武 先生(医療法人定生会 谷口病院 理事長・院長)

講演②：シンポジウム「みんなで考えよう大阪の性教育」

宮川 淳子 先生 (吹田市立第三中学校 養護教諭)

橋本 富子 先生 (大阪府助産師会 子育て・女性の健康支援センター長)

田辺 晃子 先生 (jMOG 田辺レディースクリニック 理事長)

中村 礼子 先生 (なかむら助産所 所長)

- ◆日本産科婦人科学会(日本専門医機構【2単位】)、日本産婦人科医会研修の単位を付与します。
ご参加の医師各位は各会の「会員証QRコード」をご準備ください。
- ◆「大阪の性教育の未来を考える」では、CLoCMIP®(助産実践能力習熟段階;クリニカルダラー)レベルⅢ認証申請要件の必須研修WHC指定項目「多様な性の支援」の研修終了証を配布します。

＜ ランチョンセミナー 12:25～13:25 ＞

座 長：玉上 麻美 先生 (大阪公立大学大学院 看護学研究科 教授)

演 題：「乳がん治療とがんサバイバーにおけるヘルスケア～妊娠中・授乳中における乳がんの診断と管理を含めて～」

演 者：柏木 伸一郎 先生 (大阪公立大学大学院 乳腺外科学 教授)

後 援：大塚製薬株式会社ニュートラシューティカルズ事業部

＜ 総 会 13:35～13:45 ＞

三枚 卓也 先生

＜ 学術集会 13:45～16:40 ＞

会 費：一般 5,000円 (参加費4,000円・年会費1,000円)

学生 ※学生証を受付にて提示 2,500円 (参加費2,000円・年会費500円)

大阪産婦人科医会会員 4,000円 (参加費4,000円・年会費徴収済)

お支払いは現金のみです。その他の決済はいたしかねます。

後援：大阪産婦人科医会/大阪府看護協会/大阪府助産師会/OGCS看護師・助産師会

Time Schedule

	時 間	内 容 (演者および進行)	
オリエンテーション	9:20 ~ 9:30		
学術集会長挨拶	9:30 ~ 9:35	谷口 武 先生	
研修会	9:35 ~ 10:20	講演1 谷口 武 先生	
	10:20 ~ 10:25	休憩 (5分間)	
	10:25 ~ 12:15	講演2(シンポジウム)	
		宮川 淳子 先生	
		橋本 富子 先生	
		田辺 晃子 先生	
		中村 礼子 先生	
ディスカッション			
ランチョンセミナー	12:25 ~ 13:25	柏木 伸一郎 先生	
総 会	13:35 ~ 13:45	三枚 卓也 先生	
学術集会 (演題数：16)	13:45 ~ 14:25	第1群【5題】	
	14:25 ~ 14:35	休憩 (10分間)	
	14:35 ~ 15:25	第2群【6題】	
	15:25 ~ 15:35	休憩 (10分間)	
	15:35 ~ 16:15	第3群【5題】	
授賞式	16:15 ~ 16:35	第62回学術奨励賞・ 竹村喬記念奨励賞 演題発表	
閉会挨拶	16:35 ~ 16:40	橘 大介 先生	

企 業 展 示

アメジスト大衛株式会社

広 告 協 賛

株式会社 明治

学術集会プログラム

学術集会長：谷口 武 (医療法人定生会 谷口病院 理事長・院長)

※○が発表者

第1群【5題】 13：45 ～ 14：25

座長：白石 三恵 先生 (大阪大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 統合保健看護科学分野 生命育成看護科学講座 教授)

1. 当院における産科危機的出血対応フローチャートの構築と実践

○金原 光咲¹⁾, 中内 知沙¹⁾, 和田 結衣¹⁾, 恵 愛¹⁾, 直 聖一郎²⁾, 永易 洋子²⁾, 藤田 太輔²⁾

1) 大阪医科薬科大学病院看護部, 2) 大阪医科薬科大学病院産婦人科

2. 帝王切開分娩時のSTSと夫立ち合いの取り組み

○小川 美菜子¹⁾, 上野 宏美¹⁾, 土居 暁¹⁾, 谷口 武¹⁾

1) 医療法人定生会 谷口病院

3. ERAS導入後の当院での取り組み

○辻 美穂¹⁾, 番匠谷 麻貴子¹⁾, 上野 宏美¹⁾, 大久保 伊津子¹⁾, 谷口 武¹⁾

1) 医療法人定生会 谷口病院

4. 立ち会い分娩を体験したパートナーの気持ちの変化及び早期父性役割獲得に向けた支援

○善家 沙季¹⁾, 岡谷 芽生¹⁾, 小幡 加奈子¹⁾, 永田 規子¹⁾, 細田 空見¹⁾, 矢野 春菜¹⁾, 山田 和沙¹⁾, 吉村 法子²⁾, 屋敷 久美²⁾

1) 聖バルナバ助産師学院105回生, 2) 聖バルナバ助産師学院教員

5. 助産師の在留外国人妊産婦対応に関する文献検討

○岸和田谷 悠子¹⁾, 玉上 麻美²⁾

1) 大阪公立大学大学院看護学研究科 先進ケア科学領域 ウィメンズヘルスケア科学博士前期課程

2) 大阪公立大学大学院看護学研究科 先進ケア科学領域 ウィメンズヘルスケア科学

座長：今村 美生 先生 (近畿大学 医学部附属病院 看護師長)

6. A病院における精神疾患合併妊婦の産後のEPDS増悪因子について
—増悪因子から考えられる助産師の役割—

森本 恵衣¹⁾，山崎 由美子¹⁾，池田 真帆¹⁾，福和 直美¹⁾，加嶋 洋子²⁾

1) 近畿大学病院看護部 30 病棟，2) 近畿大学産婦人科

7. 母親の関心に伴う母乳育児支援

○西 秋津¹⁾，小西 有里¹⁾，土居 暁¹⁾，今井 明子¹⁾，谷口 武¹⁾

1) 医療法人定生会 谷口病院

8. 「対面カンガルー」で始める「母子関係作り」第1報「その成果」

○笠松 堅實¹⁾，永谷 ひとみ¹⁾，桃原 花奈¹⁾，笠松 範子¹⁾

1) 笠松産婦人科・小児科

9. 「対面カンガルー」で始める「母子関係作り」第2報「その評価」

○笠松 堅實¹⁾，永谷 ひとみ¹⁾，桃原 花奈¹⁾，笠松 範子¹⁾

1) 笠松産婦人科・小児科

10. 産後ケアに対する母親の認識及び産後ケアを効果的に活用するための課題

～利用したい対象が利用できるために～

○左近 有希¹⁾，井上 由希子¹⁾，大山 千尋¹⁾，篠原 愛¹⁾，杉尾 日菜¹⁾，西栗 悠貴¹⁾，中尾 美咲¹⁾，
屋敷 久美²⁾

1) 聖バルナバ助産師学院 105 回生，2) 聖バルナバ助産師学院

11. 病院勤務の看護職が養育者へ向けに行う育児支援サービスの情報提供に関する実態調査

○稲垣 早倫¹⁾，赤松 綾香¹⁾，増田 睦子¹⁾，山下 香苗¹⁾

1) 地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センターNICU/GCU 病棟

第3群【5題】 15:35 ～ 16:15

座長：栗原 康 先生（大阪公立大学大学院 医学研究科 女性生涯医学 講師）

12. 管理栄養士による専門学校生対象のプレコンセプションケア講座の実施と評価

- 花田 尚香¹⁾，黒田 浩正¹⁾，大河 貴美子¹⁾，遠藤 文絵¹⁾，名和田 紗也可¹⁾，前田 絢香¹⁾，春木 篤¹⁾
1) 医療法人正育会 春木レディースクリニック

13. 就労女性の月経随伴症状に関する文献検討

- 渡邊 亜紀¹⁾，玉上 麻美²⁾
1) 大阪公立大学大学院看護学研究科先進ケア科学領域ウィメンズヘルスケア科学博士前期課程
2) 大阪公立大学大学院看護学研究科先進ケア科学領域ウィメンズヘルスケア科学

14. 子宮頸がん検診受診行動とポジティブ心理的要因との関連性

- 北田 温¹⁾，島田 玲奈¹⁾，藤井 優果¹⁾，有田 容子¹⁾，西川 朋和¹⁾，村田 紋子²⁾，岩原 昭彦³⁾
1) ベルランド看護助産大学校助産学科 32 回生，2) ベルランド看護助産大学校助産学科，
3) 京都女子大学心理共生学部

15. 当院における 10 代摂食障害患者への栄養士との取り組み

- 辺見 佳永¹⁾，上野 加奈¹⁾，直原 廣明¹⁾
1) 直原ウィメンズクリニック

16. 無痛分娩に対する偏見と妊娠期の助産ケア

- 釜谷 星花¹⁾，朝倉 杏咲¹⁾，川越 菜央¹⁾，桑本 紗和¹⁾，中西 咲穂¹⁾，西川 うらら¹⁾，
山口 柚香¹⁾，江崎 薫世²⁾，屋敷 久美²⁾
1) 聖バルナバ助産師学院 105 回生，2) 聖バルナバ助産師学院

研修会

テーマ：「みんなで考えよう大阪の性教育」

座長：遠藤 誠之 先生（大阪大学大学院医学系研究科 母性胎児科学研究室 教授）

講演 1 「25年の性教育活動 大切にしたいこと そしてこれから・・・」

9:35 ~ 10:20

谷口 武 先生（医療法人定生会 谷口病院 理事長・院長）

講演 2 シンポジウム「みんなで考えよう大阪の性教育」

10:25 ~ 12:15

「学校現場での性教育のニーズ ～中学校の教員の立場から思うこと～」

宮川 淳子 先生（吹田市立第三中学校 養護教諭）

45分

「大阪府助産師会のセクシャリティ教育の取り組み」

橋本 富子 先生（大阪府助産師会 子育て・女性の健康支援センター長）

15分

「大阪産婦人科医会における性教育の取り組みと課題」

田辺 晃子先生（jMOG 田辺レディースクリニック 理事長）

15分

「地域におけるいのちの授業について」

中村 礼子先生（なかむら助産所 所長）

15分

Discussion

20分程度

- ・ 内容 伝えたいこと！ 伝わってる？
- ・ 学校現場と医療の連携
 - ・ 性教育バッシングがあった
 - ・ 1992年 性教育元年 ラブ&ポディーBOOK 発刊 回収
 - ・ 2003年 七生養護学校事件
 - ・ 2004年 性教育の手引きの改訂
 - ・ はじめ規定 性交に関する内容は取り扱わない
 - ・ 失われた20年
 - ・ 2021年 命の安全教育 フェムテク 家庭での性教育
- ・ 性犯罪に関する法律改正
 - ・ 性交同意年齢の引き上げ それまでに意味のある性教育
- ・ 国際標準の包括的性教育をみんなの手に
- ・ だからこそ地域でのコンセンサスの豊穡が必要
- ・ みんなで考える性教育 どんな連携が可能か

ランチオンセミナー

ランチオンセミナー

座 長：大阪公立大学大学院 看護学研究科 教授 玉上 麻美 先生
演 者：大阪公立大学大学院 乳腺外科学 教授 柏木 伸一郎 先生

演 題 『乳がん治療とがんサバイバーにおけるヘルスケア～妊娠中・授乳中における乳がんの診断と管理を含めて～』 12:25 ~ 13:25

柏木 伸一郎 先生 (大阪公立大学大学院 乳腺外科学 教授)

抄録：

ホルモン受容体陽性 HER2 陰性の乳がん治療は、新規薬剤の登場や最新エビデンスの創出により治療成績が向上し、新たな時代を迎えるようになった。現在、早期乳がんにおける術後内分泌療法に至適投与間は、閉経前で 10 年、そして閉経後では 7~10 年が推奨されている。また転移・再発乳がんでは、CDK4/6 阻害剤、mTOR 阻害剤に加えて AKT 阻害剤も内分泌併用療法として実施可能となった。しかしながら治療成績の向上には、薬物療法の完遂が鍵となるため、がんサバイバーにおけるヘルスケアの重要性がますます求められるようになってきている。

一方で、イソフラボンに含まれるダイゼインの腸内細菌による代謝産物であるエクオールは、更年期女性に対する「更年期症状の軽減」「閉経後の骨密度低下抑制」「手指の不調の改善」などの報告がある。それゆえ、内分泌療法に伴う副作用マネジメントとしてのエクオールの効果に期待されている。また乳がん診療ガイドラインにおいても、「イソフラボンの摂取が乳がん発症リスクを軽減させる可能性がある」と記載されている。本セミナーでは、妊娠中・授乳中における乳がんの診断と管理を含め、最新の乳がん治療とがんサバイバーにおけるヘルスケアについて理解を深め、エクオールの可能性について概説したい。

2002 年 3 月 埼玉医科大学医学部医学科 卒業
2002 年 4 月 大阪市立大学大学院医学研究科 腫瘍外科学 (第一外科) 入局
2012 年 4 月 大阪市立大学大学院医学研究科 細胞情報学 特任助教
2012 年 10 月 大阪市立大学大学院医学研究科 腫瘍外科学 病院講師
2015 年 4 月 大阪市立大学大学院医学研究科 腫瘍外科学 講師
2022 年 4 月 大阪公立大学大学院医学研究科 乳腺外科学 講師
2023 年 1 月 大阪公立大学大学院医学研究科 乳腺外科学 准教授
2023 年 10 月 大阪公立大学大学院医学研究科 乳腺外科学 教授 現在に至る

一般演題

1 群

1. 当院における産科危機的出血対応フローチャートの構築と実践

○金原 光咲(Misaki Kinbara)¹⁾, 中内 知沙(Chisa Nakauchi)¹⁾, 和田 結衣(Yui Wada)¹⁾,
恵 愛(Megumi Megumi)¹⁾, 直 聖一郎(Seiichirou Nao)²⁾, 永易 洋子(Yoko Nagayasu)²⁾,
藤田 太輔(Daisuke Fuzita)²⁾

1) 大阪医科薬科大学病院看護部, 2) 大阪医科薬科大学病院産婦人科

【目的】産科危機的出血は妊産婦死亡の原因として第1位を占める。分娩時の大量出血に、速やかで統一した対応を行い、出血を最小限に抑えるためにフローチャートを構築した。

【方法】フローチャートに則り対応した症例を報告する。

【結果】癒着胎盤のためA産婦人科よりOGCS搬送、救急車内からSI>2と連絡あり、当院救急外来へ到着後、大量輸血を行い15分後に手術室へ移送、挿管下にて用手剥離施行。当院での出血2680ml (total4980ml)。その後子宮収縮良好に経過し、産褥5日目に母児共に退院となった。

【考察】産科危機的出血の対応フローチャートを用いることで、スムーズな対応ができ出血を最小限に抑えることが出来た。救急外来や手術室と合同でシミュレーション教育を継続して今後も行い、速やかな対応ができるようにする必要がある。

【key words】産科危機的出血、フローチャート、シミュレーション

2. 帝王切開分娩時のSTSと夫立ち合いの取り組み

○小川 美菜子(Minako Ogawa)¹⁾, 上野 宏美(Hiromi Ueno)¹⁾, 土居 暁(Aki Doi)¹⁾,
谷口 武(Takeshi Taniguchi)¹⁾

1) 医療法人定生会 谷口病院

【目的】帝王切開分娩で出産する母親は手術中の不安や恐怖、孤独感を抱えている。また経膈分娩で産めなかったという劣等感を抱き何年も悩み苦しむ母親もいる。それらの苦痛を軽減し家族の絆を深める目的で帝王切開分娩でのSTS (skin to skin) ・夫立ち合いを開始した。これらが夫婦へどう影響を与えるか明らかにするため本研究を行った。

【方法】STSと立ち合いに関するアンケートを59組の夫婦へ行った。

【結果】STSにより母親は出産した実感や児への愛着を獲得し、さらに夫が立ち合うことで心の支えとなり帝王切開分娩に対する不安は軽減した。また、夫にとっては親としての自覚や児への愛着を獲得する機会となった。

【考察】帝王切開分娩時のSTS・立ち合いにより夫婦で児の誕生を実感することは、家族の絆を深め出産満足度が高まることが期待された。これらから帝王切開分娩においても経膈分娩と同様にバースプランを夫婦で考え家族中心 (Family Centered Cesarean Delivery) の出産体験ができるよう支援することが重要と考える。

【Key words】帝王切開分娩、STS、夫立ち合い、Family Centered Cesarean Delivery

3. ERAS 導入後の当院での取り組み

○辻 美穂(Miho Tsuji)¹⁾, 番匠谷 麻貴子(Makiko Banshoya)¹⁾, 上野 宏美(Hiromi Ueno)¹⁾,
大久保 伊津子(Itsuko Okubo)¹⁾, 谷口 武(Takeshi Taniguchi)¹⁾

1) 医療法人定生会 谷口病院

【目的】帝王切開分娩は経膣分娩に比べ疼痛が強く育児開始が遅れがちになる。疼痛管理を行うことで、経膣分娩と同様に出産直後から育児に取り組むことができると考え術後早期回復プログラム(ERAS)を導入、その前後の評価を行った。

【方法】ERAS 導入前後 76 名ずつを対象に、膀胱留置カテーテル抜去時間、及び同室開始時期、ERAS 以外の鎮痛剤使用頻度、頻回授乳の割合を比較した。

【結果】ERAS 導入後、疼痛管理ができ同室開始時期が早くなった。また初産婦に於いて術後 1 日目の頻回授乳が増えた。

【考察】疼痛やカテーテル類の留置は離床が遅れる原因の一つと考えられ、それらを取り除くことで育児が早期にスタートできる。特に育児に不慣れな初産婦に於いて早期母子接触を実現し、育児に対する自信につながりやすいと考えられた。

【Key words】ERAS、疼痛管理、早期母子接触

4. 立ち会い分娩を体験したパートナーの気持ちの変化及び早期父性役割獲得に向けた支援

○善家 沙季(Saki Zenke)¹⁾, 岡谷 芽生(Mei Okaya)¹⁾, 小幡 加奈子(Kanako Obata)¹⁾,
永田 規子(Noriko Nagata)¹⁾, 細田 空見(Kumi Hosoda)¹⁾, 矢野 春菜(Haruna Yano)¹⁾,
山田 和沙(Nagisa Yamada)¹⁾, 吉村 法子(Noriko Yoshimura)²⁾, 屋敷 久美(Hisami Yashiki)²⁾

1) 聖バルナバ助産師学院 105 回生, 2) 聖バルナバ助産師学院教員

【目的】パートナーと産婦の立ち会い分娩に対する気持ちの現状を知り、課題を検討することでパートナーの早期父性役割獲得に向けた支援に繋げる。

【方法】産褥期にある対象に研究目的と方法について説明し、対象及びパートナーの両者に Web での回答を依頼した。SPSS で重回帰分析を行い、自由記述については KJ 法で分析を行った。

【結果】立ち会い分娩時におけるパートナーの妻・子への関わりと父親役割獲得に関連はなかった。一方で、パートナーと妻双方が、立ち会い分娩を選択したことにより父親役割の高まりを感じていることが窺えた。

【考察】立ち会い分娩時に求められる支援としてパートナーが妻に行っている関わりを認める声掛けや、ケアの振り返りを行うなど立ち会い分娩に対して満足感や達成感が得られる関わりが求められる。また、パートナーから「妻に対する無力感を感じた」という回答もあり、妻へのサポートに対して自信を持てるような支援が必要である。

5. 助産師の在留外国人妊産婦対応に関する文献検討

○岸和田谷 悠子(Yuko Kishiwadaya)¹⁾, 玉上 麻美(Mami Tmaue)²⁾

1) 大阪公立大学大学院看護学研究科 先進ケア科学領域 ウィメンズヘルスケア科学博士前期課程

2) 大阪公立大学大学院看護学研究科 先進ケア科学領域 ウィメンズヘルスケア科学

【目的】周産期における助産師の在留外国人妊産婦対応と在留外国人妊産婦の実態を把握し、在留外国人妊産婦対応について今後の課題を明らかにする。

【方法】医中誌Webより『外国人』『助産学』他をキーワードとして文献検索を行い、在留外国人妊産婦対応について記載のある原著論文15件から『外国人が感じる3つ(言葉・こころ・制度)の壁』に分類し、実態を分析した。

【結果】在留外国人妊産婦は「孤独感」や「異文化環境下で出産する心細さ」を感じる中で、〈日本の保健医療についての理解の困難〉や「言葉がわからない」という問題を抱えていた。助産師の課題として、在留外国人妊産婦の孤独感や異文化の医療環境に対する不安に配慮したコミュニケーションや日本の医療についての情報提供をする必要がある。

【考察】助産師は、『外国人が感じる3つの壁』があることを理解した上で、在留外国人妊産婦対応の向上を目指すべきであると考えられる。

2群

6. A病院における精神疾患合併妊婦の産後のEPDS増悪因子について —増悪因子から考えられる助産師の役割—

森本 恵衣(Satoe Morimoto)¹⁾, 山崎 由美子(Yumiko Yamasaki)¹⁾, 池田 真帆(Maho Ikeda)¹⁾,
福和 直美(Naomi Hukuwa)¹⁾, 加嶋 洋子(Youko Kashima)²⁾

1) 近畿大学病院看護部 30 病棟, 2) 近畿大学産婦人科

【目的】精神疾患合併妊娠は産後うつ病のハイリスク要因とされ、取り組みが非常に重要である。本研究では、精神疾患合併妊婦の産後のEPDS悪化に関連する因子を明確化することを目的とした。

【方法】2022年1月から2023年12月までに当院で妊婦健診から分娩まで行った精神疾患合併妊婦69例を対象とし、後方視的に検討した。EPDS施行時期別(妊娠中、産後)、またEPDSの点数別(妊娠中 ≥ 13 点、分娩後 > 9 点)で4群に分け検討した。

【結果】不眠が有意に分娩後悪化群で高かった($p < 0.0001$)。また不眠の原因として、夜間母児同室なし、また抗精神病薬、睡眠薬の内服なしで有意にEPDS増悪を認めた($p = 0.02$)。

【考察】育児中心の生活で不眠や疲労が増し、EPDS悪化の可能性があるため、退院前に家族や医師と睡眠確保の対策を協議し、支援体制の構築が必要と考える。また、妊産婦に社会資源の情報を提供し、精神科医とも連携して、支援の充実を図るべきであると考え。

【Key words】精神疾患合併妊婦、エジンバラ産後うつ病評価表、EPDS

7. 母親の関心に伴う母乳育児支援

○西 秋津(Akitsu Nishi)¹⁾, 小西 有里(Yuri Konishi)¹⁾, 土居 暁(Aki Doi)¹⁾,
今井 明子(Akiko Imai)¹⁾, 谷口 武(Taniguchi Takeshi)¹⁾

1) 医療法人定生会 谷口病院

【目的】母親の母乳育児に対する考えは様々である。また、母親の母乳育児の関心は妊娠・産褥各期で変化する。各期にあった支援を行うため、母親の関心の内容を調査した。

【方法】母親が母乳育児を経験して感じたことや調べた育児情報の取得場所・内容をアンケート調査した。アンケートは自由記述と選択式チェックボックスとした。

【結果】母親の80%はSNSで情報を収集していた。

妊娠中は必要物品や分娩に関心が高く授乳は低かった。また、授乳は産後に育児経験することで関心が高くなっていた。

退院後は母乳外来に相談することで母親の悩み事が解決した。

2週間健診より1か月健診に母乳率が高くなり授乳を楽しみと思う母親が増加した。

【考察】継続した寄り添い型の支援で授乳が楽しいと思う母親が増える。

悩み事が生じたタイミングでタイムリーに情報を提供する必要がある、SNSは情報提供に有用である。

【Key words】母親の関心、SNS、寄り添い

8. 「対面カンガルー」で始める「母子関係作り」第1報「その成果」

○笠松 堅實(Kenjitsu Kasamatsu)¹⁾, 永谷 ひとみ(Hitomi Nagatani)¹⁾, 桃原 花奈(Kana Toubaru)¹⁾, 笠松 範子(Noriko Kasamatsu)¹⁾

1) 笠松産婦人科・小児科

【目的】母乳育児とその支援が低迷している。一方子どもの虐待が増加して久しい。虐待は乳幼児に多く、心中以外の虐待死は、「0歳」への、「実母」による、が圧倒的に多い。「虐待防止」は実際的には不可能、一方可能なのは「虐待予防」で、「母子」が始まる「出生直後」「入院中」からの「母子関係作り」しかない。私たちの施設では「対面カンガルーケア」で始める「母子関係作り」を試みている。その行程とその結果について報告する。

【方法】出生時の「早期母子接触」に「対面カンガルー」を加えるなど、埋もれていた行程「母子関係作り」の「見える化」を試み、その成果を「母乳率」・「EPDS」で評価した。

【結果】取組み後の「母乳率」は改善していないが、「EPDS」は改善していた。

【考察】諸外国に比しわが国では産後の入院期間が長い。入院中に「母子」間で「やり取り」が始まり深まれば、「母子関係作り」に、「虐待予防」に貢献できるのではないかと、思う。

9. 「対面カンガルー」で始める「母子関係作り」第2報「その評価」

○笠松 堅實(Kenjitsu Kasamatsu)¹⁾, 永谷 ひとみ(Hitomi Nagatani)¹⁾, 桃原 花奈(Kana Toubaru)¹⁾, 笠松 範子(Noriko Kasamatsu)¹⁾

1) 笠松産婦人科・小児科

【目的】出産出生後の「母子関係作り」に繋がる（埋もれている）、赤ちゃんの「サーブ」には、順に「注視」（視覚的）、「泣き」（聴覚的）、「おっぱい」（物質的）、「微笑み」（心理的）がある。退院時に築き始めた「母子関係」が、退院後1ヵ月時で起こった変化について、「注視」「微笑み」の2ポイントで評価を試みた。

【方法】退院時「母子関係アンケート」より赤ちゃんの「注視」「泣き」「微笑み」の日齢、1ヵ月健診時「母子のやり取り調査」の「注視」「微笑み」の日齢を抽出、比較検討した。

【結果】入院中-退院時は順調に「母子間」の「やり取り」が始まり、進んでいった。しかしながら、1ヵ月健診での「母子関係作り」の母親評価は後退している結果であった。

【考察】1ヵ月時に母子の「やり取り～注視、微笑み」が後退している、その一方、母親の「EPDS」は悪化していない。この違いの意味するものは何か、考える。

10. 産後ケアに対する母親の認識及び産後ケアを効果的に活用するための課題 ～利用したい対象が利用できるために～

○左近 有希(Yuki Sakon)¹⁾, 井上 由希子 (Yukiko Inoue)¹⁾, 大山 千尋(Chihiro Oyama)¹⁾,
篠原 愛(Ai Shinohara)¹⁾, 杉尾 日菜(Hina Sugio)¹⁾, 西栗 悠貴(Yuki Nishikuri)¹⁾,
中尾 美咲(Misaki Nakao)¹⁾, 屋敷 久美(Hisami Yashiki)²⁾

1) 聖バルナバ助産師学院 105 回生、2) 聖バルナバ助産師学院

【目的】 母親の産後ケアに対する認識と利用状況、および産後ケアの効果的活用に向けた課題を明確にし、利用したい母親がスムーズに利用できる為の支援に繋げる。

【方法】 1 か月健診に訪れた母親に対し研究の目的と方法を説明し、自記式質問紙への回答を依頼した。SPSS で分析、自由回答は KJ 法で分析した。

【結果】 産後ケアの認識は利用群・非利用群に差はなかった。産後ケアの認知群は 86 名、利用群 10 名のうち 9 名が産後ケアを利用して良かったと回答した。利用した理由は「疲労感」が最も多く、受けたサービスは「休息」が多い事からニーズに対応していたことが満足に繋がったと考える。経産婦は託児が困難なため事業を利用しにくいと感じている。

【考察】 産後ケアを実際に利用した人の満足感が高い。ケア内容の更なる周知の検討、家族への理解・協力要請、SNS での情報発信の必要性、申請方法の工夫や経産婦が利用しやすい制度への整備も必要だと考える。

11. 病院勤務の看護職が養育者へ向けて行う育児支援サービスの情報提供に関する実態調査

○稲垣 早倫(Sari Inagaki)¹⁾, 赤松 綾香(Ayaka Akamatsu)¹⁾, 増田 睦子(Mutsuko Masuda)¹⁾,
山下 香苗(Kanae Yamashita)¹⁾

1) 地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センターNICU/GCU 病棟

【目的】 病院勤務の看護職が養育者に育児支援をする際、育児支援サービスを活用し情報提供しているかを明らかにすること。

【方法】 A センターの小児・周産期病棟の看護職に対し、育児支援サービスの活用状況を問う質問用紙を独自に作成し配布、留置法で回収。A センター看護研究倫理審査の承認を得た。

【結果】 有効回答率は 42.6%。助産師は全員が育児相談を受けていたが看護師は半数以下であった。相談のタイミングの多くは、褥婦もしくは子どもの病気で入院している間であり、育児支援サービス情報を活用していた。しかし、看護職の多くはその内容を十分理解していなかった。

【考察】 育児をする家族を取り巻く問題は多岐にわたる。核家族化が進み身近な相談者が少ない中、医療機関における育児支援は看護職の重要な役割である。しかしながら、医療機関の看護職が担える育児支援は限られ、育児支援サービスを含めた地域・行政との連携が不可欠である。

3群

12. 管理栄養士による専門学校生対象のプレコンセプションケア講座の実施と評価

○花田 尚香(Naoko Hanada)¹⁾, 黒田 浩正(Hiromasa Kuroda)¹⁾, 大河 貴美子(Kimiko Okawa)¹⁾, 遠藤 文絵(Fumie Endo)¹⁾, 名和田 紗也可(Sayaka Nawada)¹⁾, 前田 絢香(Ayaka Maeda)¹⁾, 春木 篤(Atsushi Haruki)¹⁾

1) 医療法人正育会 春木レディースクリニック

【目的】管理栄養士によるプレコンセプションケア講座が、若い世代の妊娠出産への意識、自らの健康や食生活への関心を高めるきっかけとなるかを検討する。

【方法】専門学校生を対象として管理栄養士が講座を実施し、受講前後のアンケートの比較によりその効果を検討した。講座内容は「プレコンセプションケアの必要性」「妊孕力とライフプラン」「妊娠に適した身体づくり」「妊娠と栄養」とした。妊娠に関する知識の判定にはカーディフ妊孕性知識評価尺度を用いた。

【結果】受講後、妊娠や健康管理に対する意識の向上が見られた。妊娠に関する知識の得点の平均も2.5点上昇した。管理栄養士が講座を担当することに対しては約98%がメリットがあると回答した。

【考察】管理栄養士による講座が若い世代のプレコンセプションケアに関する意識と知識を高める可能性があることが示唆された。今後は講座内容の精査および他の医療職との協働を目指す。

13. 就労女性の月経随伴症状に関する文献検討

○渡邊 亜紀(Aki Watanabe)¹⁾, 玉上 麻美(Mami Tamaue)²⁾

1) 大阪公立大学大学院看護学研究科先進ケア科学領域ウィメンズヘルスケア科学博士前期課程

2) 大阪公立大学大学院看護学研究科先進ケア科学領域ウィメンズヘルスケア科学

【目的】就労女性の月経随伴症状の実態を把握し、今後の支援における課題を明らかにする。

【方法】医中誌Webより、「月経困難症」、「看護職」、「就労女性」のキーワードで文献を検索し、就労女性における月経随伴症状の実態について記載のある17件の原著論文を分析した。

【結果】月経随伴症状を有する女性は、仕事に支障をきたすと自覚しながら就業していたが休息できる環境は整っていない。また、月経随伴症状に対するセルフケアは、鎮痛剤や低用量ピルに関する知識不足などにより十分に行われていない。さらに、症状の自覚から受診までの期間はヘルスリテラシーに関連することが明らかになった。これらの実態より、休息が取れる就業環境の整備やセルフケアに関する情報提供、インターネットを介した健康教育の開発などが課題として明らかになった。

【考察】今後、月経随伴症状に対するヘルスリテラシーとセルフケアの関連についてさらなる調査が必要である。

14. 子宮頸がん検診受診行動とポジティブ心理学的要因との関連性

○北田 温(Haru Kitada)¹⁾, 島田 玲奈(Reina Shimada)¹⁾, 藤井 優果(Yuka Fujii)¹⁾,
有田 容子(Yoko Arita)¹⁾, 西川 朋和(Towa Nishikawa)¹⁾, 村田 紋子(Ayako Murata)²⁾,
岩原 昭彦(Akihiko Iwahara)³⁾

1) ベルランド看護助産大学校助産学科 32 回生, 2) ベルランド看護助産大学校助産学科,
3) 京都女子大学心理共生学部

【目的】子宮がん検診に対する自己効力感や主観的利得とポジティブ心理学的要因との関連性を検証することを目的とする。

【方法】クロスマーケティング社に登録している 600 名 (29.67±5.76) を対象としてオンライン調査を実施した。子宮頸がん検診の受診行動に関する質問 (受診経験、受診意思)、子宮頸がん検診に対する自己効力感、ポジティブ心理学的変数 (人生の意味、セルフ・コンパッション) について回答を求めた。

【結果】階層的重回帰分析を行った結果、人生の意味とセルフコンパッションの交互作用が有意であった。セルフコンパッション低群のみ人生の意味と主観的利得との関連が認められた ($\beta = .345$, $t(591)$, $p < .001$)。一方、高群には両者の関連は認められず、主観的利得の得点が人生の意味に関係なく高かった。

【考察】自分を思いやる気持ちを育むことが、子宮頸がん検診の受診行動を高めると推察される。

15. 当院における 10 代摂食障害患者への栄養士との取り組み

○辺見 佳永(Kae Hemmi)¹⁾, 上野 加奈(Kana Ueno)¹⁾, 直原 廣明(Hiroaki jikihara)¹⁾

1) 直原ウィメンズクリニック

10 代の摂食障害患者数はコロナ禍による社会環境の変化や SNS メディアの影響など年々増加傾向にある。10 代での発症は低身長や無月経、将来の骨粗鬆症や不妊のリスクとなる。低栄養により集中力の低下やうつ状態、認知機能の低下などの変化をもたらす。摂食障害は早い段階での治療介入が有効であるにも関わらず、専門医は少なく受診することが困難な状況にある。相談先がなく受診が遅れ悪化することも懸念される。産婦人科では月経不順や無月経などを主訴に 10 代の摂食障害患者、その傾向にある患者が受診する機会が少ない。10 代の摂食障害患者の初期段階や、その傾向にある患者に対し栄養士を含めた多職種で支援することは、10 代の心身の回復成長を支援できると考える。当院での取り組みを紹介する。

16. 無痛分娩に対する偏見と妊娠期の助産ケア

○釜谷 星花(Hoshika Kamatani)¹⁾, 朝倉 杏咲(Azusa Asakura)¹⁾, 川越 菜央(Nao Kawagoe)¹⁾, 桑本 紗和(Sawa Kuwamoto)¹⁾, 中西 咲穂(Sakiho Nakanishi)¹⁾, 西川 うらら(Urara Nishikawa)¹⁾ 山口 柚香(Yuzuka Yamaguchi)¹⁾, 江崎 薫世(Kaoruyo Ezaki)²⁾, 屋敷 久美(Hisami Yashiki)²⁾

1) 聖バルナバ助産師学院 105 回生, 2) 聖バルナバ助産師学院

【目的】無痛分娩を選択した妊婦がそれに対する偏見を含めどのような状況にあったのか、それにどう対処したのかについて把握し、今後の必要なケアについて検討していく。

【方法】妊娠 24 週の妊娠 24 週以降の初産婦・経産婦を対象に A 病院で無痛分娩について web アンケートを実施し、得られたデータを集計分析した。

【結果】無痛分娩に対する偏見を受けたことがあると答えた人は 4 割、偏見を示した相手の年齢は「60 代」「70 代」が半数を占めていた。偏見を受けたとしても主体的に無痛分娩を選択している女性が多く存在していた。

【考察】妊産婦はもちろん、その家族に対して無痛分娩に関する正確な情報を提供する必要がある。これらのケアによって自らが選択した無痛分娩に対し、安心して出産、育児に臨むことができるように助産師が支援を行うことが望まれる。

【key words】偏見、無痛分娩

健康にアイデアを

meiji

母乳サイエンス

育つチカラに、安心を。

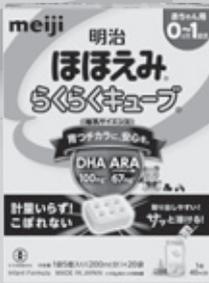
DHA 100mg^{※1} ARA (アラキドン酸) 67mg^{※1}



1
3 2



粉末タイプ



キューブタイプ



200ml 120ml

液体タイプ

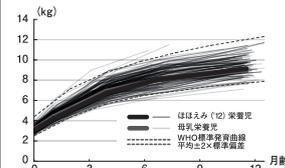
※1 100g当たりの含有量 ※2 インターナショナル乳児用ミルク市場2023年4月~2024年3月累計販売金額

安心・安全の 明治ほほえみ No.1ブランド シリーズ

母乳をお手本に進化をつづけ、赤ちゃんの確かな発育を目指しました。

明治のこだわり 20万人以上の赤ちゃんの発育調査

50年以上にわたり、20万人以上の赤ちゃんの発育を調査



明治のこだわり 6,000人以上の母乳の組成調査

日本全国6,000人以上のママから提供いただいた母乳の成分組成を調査



●3回の調査延べ人数 1回目 1979年(1,700人)、2回目 1998~1999年(4,243人)、3回目 2012~2014年(405人)

もしもに備えよう! 備蓄にも適した「明治ほほえみらくらくミルク」

選べる2つの容量 赤ちゃんの飲む量にあわせて使えます

フェーズフリー認証取得 普段使いからもしもに備えた備蓄にも!

常温で長期保存可能

明治ほほえみ 検索

<https://www.meiji.co.jp/baby/hohoemi/>

PHASE FREE



製造時の高温殺菌により液色が茶色くなっています。

株式会社 明治